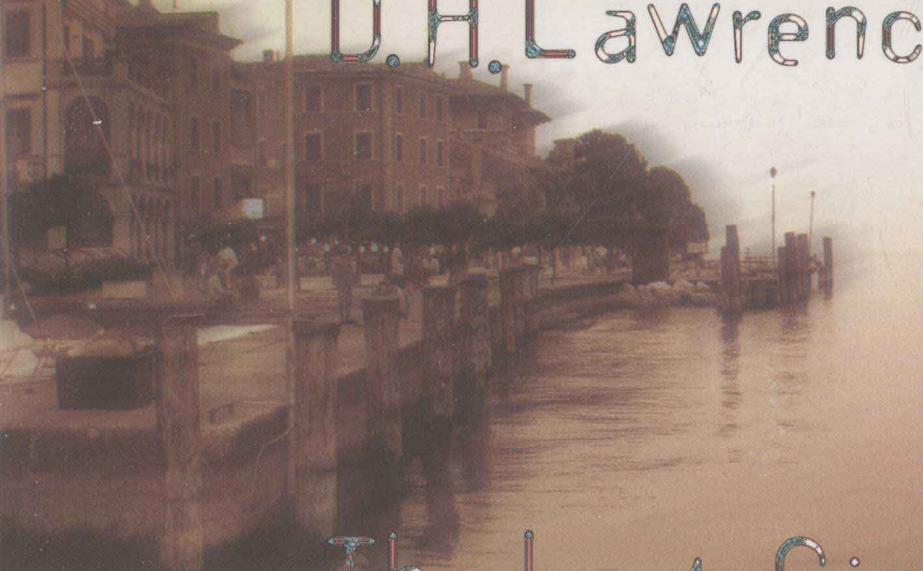




D.H. Lawrence

The Lost Girl

D.H. ロレンス

ロストガール

上村哲彦 [訳]

D. H. Lawrence

D. H. ロレンス

ロストガール

上村哲彦 [訳]

彩流社

The Lost Girl

訳者略歴

上村哲彦（かみむら・てつひこ）

1938年高知県生まれ

関西大学大学院修士課程修了

現在、関西大学文学部教授

著書

『ロレンスのイタリア』（彩流社・1996）

『ことば・意味・かたち－英米文学－批評と解説』（愛育社・1993）（共編著）

『ロレンス研究－『カンガルー』』（朝日出版・1990）（共著）

『英米文学との出会い』（昭和堂・1983）（共著）

訳書

デズモンド・イーガン『折鶴』（関西大学出版部・1995）（共訳）

D・H・ロレンス『不死鳥 上』（山口書店・1984）（共訳）

『不死鳥 下』（山口書店・1986）（共訳）

『不死鳥 II』（山口書店・1992）（共訳）

D・D・マッケロイ『実存主義と現代文学』（愛育社・1976）（共訳）

フランク・ウォーターズ『仮面の神がみ』（科学情報社・1974）

ロストガール

1997年4月25日 発行

定価はカバーに表示してあります

著者	D. H. ロレンス
訳者	上村哲彦
発行者	竹内淳夫

〒102 東京都千代田区富士見 2-2-2

電話 03 (3234) 5931

発行所 株式会社 彩流社

組版 野ばら社

印刷 憐平河工業社

製本 旬青木製本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

ISBN 4-88202-440-3

目次／ロストガール

第一章 マンチエスター商会の没落 7

第二章 アルヴァイナ・ハフトンの目覚め 36

第三章 助産婦 49

第四章 二人の女の死 68

第五章 男友達 88

第六章 ハフトン家最後の砦、エンデヴァー座 135

第七章 ナツチャ・キー・タワラ一座 188

第八章 イタリア人チツチヨ 237

第九章 「タワラの娘、アツレイエ」 276

第十章 マンチェスター商会の崩壊 344

第十一章 偽りの婚約 402

第十二章 アッレイエ、真実の婚約 448

第十三章 逃げだした妻 466

第十四章 峠越え 480

第十五章 南イタリア山中のカリファーノ 513

第十六章 不安 525

訳者あとがき 555

ロ
ス
ト
ガ
ー
ル

第一章 マンチェスター商会の没落

人口一万、三世代ぐらい続いた炭鉱町ウッドハウスを考えてみよう。三世代続いたということは、それなりに確固不動の社会であることを立証しているのである。昔からいた「この地域の金持ち」は、石炭がはらわたのように抜き取られた風景からは逃げ出し、まだ牧歌的なものが残っている地域で、その鉱山権に頼って繁栄している。町には、この辺りの炭鉱主で、ちょっと近づきたい大物がひとり残っている。三代続いた家柄で、金持ち階級の最下層に這い上り、その下に続く大衆は蹴落としてきたのである。そんな奴は放っておこう。

ウッドハウスには確固不動の社会がある。それは見事な陰影に満ちている。炭塵の黒い陰影から、石屋の砂埃、製材所のおがくず、さらには、リードやバターや肉の光沢、薬屋の匂い、医者^{ドクター}の消毒薬の匂い、銀行の支配人、会社の出納係り、牧師などの穏やかな金色の陰影、炭鉱の傘下にすべてを置いている総支配人の自動車の輝きに至るまで、あらゆる栄光の影がある。ここに最上^{トップ}のものがある。この総支配人は、世間からは樹林で隔離された、いわゆるお屋敷で人目を避けて暮らしている。金持ちに見捨てられた本物の館は、炭鉱会社の事務所として引き継がれている。

それから、問題なのは、膨大な炭坑夫の層、その次に商人の層である。その層に零細企業が交じり、小学校の教師や非国教会派の牧師などが入って多様化している。さらに高い層は、銀行の支配人、裕福な粉屋、金持ちの製鉄業者、監督派教会の牧師に炭鉱の支配人である。そしてその層の上に、ケーキの

上の、べととして艶のある、いっぱい飾られたサクラランボのように、この地方の炭鉱主がのしかかっているのである。

といった様子が、西暦一九二〇年の中部イングランドにおけるささやかな産業の町の、ややこしい社会構造である。しかし、時代を少し遡ってみよう。そうすると、豊かな歳月の最後であった、静かな一九一三年となる。

静かで豊かな年。しかし、わびしい慢性的な病巣の年でもある。結婚しそこねた女たちが、その病巣である。下層階級はべつにして、繁栄しているからといって、いったいどうして、そのほかのすべての階級が、結婚もせず、結婚もできない、いわゆるオールドミスと呼ばれる、死海の果実にも似た、そうした女たちの重荷を背負わなければならないのか。商人や、先生や、銀行の支配人や、牧師たちも皆、ひとり、二人、三人、それ以上多くの行き遅れた子女を生み出すのか。中流階級、とくに中流の下の階級が、男の子よりも、女の子をよけい生むのか。それとも、中流階級の男たちが、結婚することによって、上の階級にいたり、下の階級にいたりして、中流階級の女たちの相手がいなくなってしまうのか。というのか。それとも、中流階級の女たちが、夫を選ぶ際に融通がきかなくなってしまうのか？ どちらにしても、それは悲劇なのだ。というか、たぶん悲劇とも言えないだろう。

結婚していない中流階級の女は、よく耳にするように、性をなくしてしまった、あくせく働く産業社会の、名高い労働者なのだ。たぶん職業、つまり、彼女らが仕事をしたくてもする仕事がないだけである。だがそう決めつける前に、女性たちの意見を問うてみたほうがいい。

ウッドハウスには、「金持ち」や、商人や、牧師たちの中に、数多くの婚期を逸した女たちがいる。坑夫の女房であろうと、どんな女であろうと、町の女は皆、こうした金持ちではあるが婚期を逸したお嬢さんに結婚の機会がくるのを見ると、息を呑むのである。女房連中は、裕福な結婚式には、安堵の気

持ちで酔い痴れて集まってくるのである。というのは、階級間の嫉妬がどんなものであれ、女は、他の女がチャンスもなく、新鮮さを失って店晒しになっているのを見るのは嫌なのだ。女は皆、若い娘も含めて、中流階級の娘が、結婚相手を見つけるのを待っているのだ。そうゆうところからものすごいことが起ってくるものである。

さて、ジェイムズ・ハフトンには子供はひとりしかいなかった。娘のアルヴァイナである。確かにアルヴァイナ・ハフトンだけであつた。

だがアルヴァイナがまだ赤ん坊だつた八〇年代の初めの頃に返ってみよう。いや、ジェイムズ・ハフトンの全盛期に返ってみよう。その全盛期には、彼はウッドハウスの社交界で超一流の人物であつた。ハフトンの家はいつも裕福であつた。商人であつたことは認めなければならない。しかし、数世代が豊かに過ぐすと、商人でさえ、それなりの身分を身につけるものである。ところで、ジェイムズ・ハフトンは、二八歳のとき、ウッドハウスでマンチェスターの商品を扱う素晴らしい仕事を受け継いだ。背が高く、ほっそりした上品な、頬髭をつけた若い男で、見るからに洗練されていて、幾分ブルワー（一九世紀英国の外交官）風なところがあつた。上品な会話や上品な文学、上品なキリスト教が好みである。背が高く、ほっそりしていて、壊れ物のような若者で、軽々しいところがあり、手軽な考えが頭に一杯つまっていて、飛び抜けて美しい声の持ち主であつた。それなのに、もちろん商人である。彼は、自分より年上で、色の黒いダービシャーの旦那の娘を誘ひ出した。少なくとも、一万ポンドの持参金がついているだろうと期待していた。だが、その点では失望した。というのは、たつた八〇〇ポンドしか手に入らなかつたからだ。商売にかけてはロマンティックな性格だったので、決して彼女を許せなかつたが、彼女の扱いは最高に慇懃だつた。その妻のために、リングの皮をむいてやる光景は、見ものだつた。しかし、皮をむいて四つに割つてリングを彼女に与えたが、それだけのことである。この優雅な商人アダ

ムは、見事に芯を取ったリングをイヴに与えて、それ以上には、もう彼女に関わらなかった。そうこうしているうちに、アルヴァイナが生まれたのである。

しかしながら、こんなことがある前、つまり結婚する以前、ジェイムズ・ハフトンマンチェスター商会を設立していた。それは広大な四角い建物で——ウッドハウスでは大き過ぎたのだが——それは、この発展途上の小さな町の大通りと公道に面して建っていた。一階の正面には、ふたつのみごとな店舗があり、ひとつはマンチェスターの商品を扱い、もうひとつは、絹と羊毛を扱っていた。これがジェイムズ・ハフトンが持っていた商売上の詩^{うた}とも言えるものである。

というのも、ジェイムズ・ハフトンは夢想家であり、幾分、詩人であったのだ。つまり分かり易く言えば、商売上の詩人であった。彼は、ジョージ・マクドナルド（スコットランドの詩人・小説家。『王女と小鬼』のようなお伽話もある。一八二四—一九〇五）の小説が好きであった。そして、この作家の幻想的な作品は大変気に入っていた。商売上のものであるのだが、自分でもひとつの幻想とも言えるものを、織り上げていた。織り地の豪華な、思いもよらぬほどの見事な絹やポプリンの布を夢見ていたのである。そして、「金持ち」の馬車が、この店のショーウィンドウの前に釘づけになり、お洒落な女たちがこの店に魅惑され、恍惚としてスカートの裾を引き摺る音を立てながら、押し寄せるのを夢見ていた。そして、自らもうつとりして、美しい布をお客に提供するのだ。その布の値打ちは、お客と自分にしか分からない。その名声は、プリンセス・オブ・ウェールズのアレキサンドラとオーストリアのエリザベス皇后のようなヨーロッパの二人のベストドレッサーのところまで広がり、ついには、この二人が天上界から、ウッドハウスのこの店に天下られ、ジェイムズ・ハフトンの店で買った布地で、どれほど見事なものを作ったかを見せびらかすために、お出ましになるのだ、と。

ジェイムズ・ハフトンが、当時のリバティー百貨店やスネルグロブ装飾店になれなかったのはどう

してなのか分らない。たぶん、想像力が豊かすぎたのであろう。それはともかくも、彼が妻を新居に連れてきた当時、マンチェスター通り側のショーウィンドウは、モスリンや柄物が、まるで五月の花が咲き誇るように見え、ロンドン通りのウィンドウには、絹や豪華な布が、秋の夕暮れの雰囲氣をかもしだしていた。どこの奥さんだって目がくらんでしまうだろう。だが、石ころだらけのダービッシュャーの、石造りの家からきたこの女は、まるで方舟はてなふねの前で踊るダヴィデのように自分の亭主が商品の山の前で踊っているのを見て、ちょっと反発を感じた。ジェイムズが彼女を連れて帰った家は、ひとつの遺跡のようだった。店の階上には、備えつけの家具がついた大きな寝室があった。がっしりとしたマホガニー材でできた家具である。ああ、それにしても、あまりにもがっしりしすぎている。ジェイムズが満足して、その大きな新床に飛び込んだのは間違いない。それにしても、脚立きたちか椅子を使わなければ飛び込めなかった。だが、夫より年上で、まるで幽閉されたようなこの小柄な女は、きつと重い心で床に上り、陰気なマホガニー製のバスチュー監獄とでもいったらいいような、ベッドの向かいにある押し入れを、床の中から眺めたことであらう。それとも、うんざりした気持ちで横を向くと、そこには大きな姿見があつて、それが、奥様の前に、ぞっとするほどいつまでも、頭を垂れてかشيずいているのだった。なんという家具だろう。部屋からこの家具を取り除けられないものか。

二年目に子供が生まれた。それで、ジェイムズ・ハフトンハフトンは、この屋敷の別の端にある、半分家具の取りつけてある小さな寝室に身を引いた。そこで、ざらざらの板の上に寝て、それ以後は隠者のように暮らした。妻には、赤ん坊と家具だけが残された。妻は、それが神経に障さぶって、心臓病にかかった。

しかし、ジェイムズは蝶々のように自分の布の上を、ひらひら舞っていた。売り子たちにとっては暴君だった。ディケンズの小説に出てくるフランスのどんな侯爵でも、彼ほど優雅で洗練されていて、しかも無情にはなれなかったであらう。売り子たちはジェイムズを嫌っていた。それなのに、妙に洗練さ

れたこの男の熱心な態度が、彼女たちを放心状態にさせるのである。売り子たちは、ジェイムズに服従していた。店は、興味的になった。だが、あまりにも想像力の欠如したウッドハウスの人たちは、客としてはたいしたことはなかった。平凡なゼファー織りとか、赤いフランネルを買ったが、後で、それに黒いウーステッドのひだ飾りをつけるのである。黒いアルパカやボンバジンやメリノ織りの布を欲しがったりするウッドハウスの人たちに、ジェイムズはうんざりしていた。そんなとき、縞目のモスリンとか、インド更紗のプリントの生地を、ふんわりと広げて、勧めてみたりした。しかしこの町の住人は、まるでヘラクレスの毒を染みこなせた衣服を差し出されたように、後退りするのだった。

大売出しがあった。こうした売出しはハフトン夫人の神経性の心臓病を引き起こす大きな原因になった。この売出しでジェイムズ・ハフトンの顔に最初の疲労の色が現れた。もちろんまず最初に、よりあわせたレースかきらびやかなラメのついた、よく目立つ組紐か、縁飾りをつけて、あまり高くないモスリン、ヴェール、モスリンメリンスの柄布の値をさげて展示した。ウッドハウスの人たちは、そうした布をこわごわ買ったのだ。

だが大売出しの後、ジェイムズ・ハフトンは、ほっとして新しく在庫品を買いしめにくくなるのである。顔を緊張で引きつらせ、マンチエスターに飛んでいった。そうして、ものすごく大きな包みや箱が、次々にウッドハウスに送られてきて、店の前の舗道に下ろされた。金曜の夜がきて、ハフトンのショーウィンドウに、それらが目もあやに陳列された。うね織りの綿布、ハチの巣のように織った奇妙なトイレカバー、召使い用のフリルのついた帽子とエプロン、それらは全部、この町では初めてのものであり、ハットするような白い色であった。ジェイムズは宣伝文句を、こんなふうにした。「白い驚き」と。ウィルキー・コリンズの小説「『白衣の女』、イギリスの小説家。一八二四―一八九」を読んだことのない者には、なんのことだか分からないような文句だった。

九日間この「白い驚き」が、この町を席卷して過ぎ去ると、ジェイムズはロンドンへ姿を消した。それから数週間経った金曜日、冬物が展示された。風変わりで、みごとに冬物のコートだった。ジェイムズが扱っているものはみな婦人物であり、自分と同性の粗野な男は軽蔑していた、——ご婦人のための、風変わりでみごとに婦人用コート、厚手で黒い斑点の模様がついた布地のコートは、飾り窓の奥のほうに飾られ、熊皮の袖口をこれみよがしに立っていた。飾り窓の前面には、肩掛けや襟巻、マフといったすばらしい冬物の商品が人目を惹いていた。金曜の夜、群衆が店の前に集まってきた。ガス灯が精一杯輝いている。ジェイムズ・ハフトンには自分の芝居の初夜を待つ作者のように、その後ろで力んでいた。結果は大評判だった。が、その評判のほんとうの意味はなんだったのだろう。群衆の胸のうちには、驚き、感嘆、恐れ、それに嘲笑があった。とくに恐れのがちがかったことを、強調しておきたい。ウッドハウスの住民は、ジェームス・ハフトンが自分の基準を強制しようとしているのではないかと恐れていた。この店の商品は、すばらしいものであった。しかし、客の好みは、どうしようもなく悪いものである。人びとは店の前に立ち、指差して、クスクス笑い、冷やかした。初演の夜の作者のように、可哀想なジェイムズは、自分の作品が、奈落の底に落ちていくのを見たのであった。

しかしそれでも、ジェイムズは自分のすばらしさを信じていた。それもまた当然のことだ。彼に分かっていないのは、この土地の住人が、すばらしさというものを嫌っているということである。ウッドハウスの人たちは、平凡なことが、ゆっくりと段階を追って進んでいくことを望んでいるのだ。この平凡さというのは、あまりにも新鮮味がなく、平板なので、感受性の豊かな人の想像力には届かないものである。ウッドハウスでは、低俗な心のときめきが、次々に起こることが望まれているのである。例えば、ひとつの安っぽい平凡さが、ノッティンガムやバーミンガムから持ち込まれて、元の土地ではとくに捨てられているのに、その安っぽい平凡さが、ウッドハウスのものにとって変わる、といった図式であ

る。ウッドハウスでは、その存在の条件としての独創性とか、ほんとうの風味といったものに近づくことが嫌われるのである。このことを、ジェイムズ・ハフトンはまったく知らなかった。彼は、みごとに頭を使って、うまく商売ができるのに、それでもまだ十分ではないと思っていた。運命の女神は気紛れで、気難しい女だ。自分には理解できないほど優雅なオーストリアのエリザベス皇后か、プリンス・オブ・ウェールズのアレキサンドラ王妃みたいなのだと、思っていた。ウッドハウスはいうまでもなく、ロンドンであろうと、ウィーンであろうと、運命の女神とは、中流階級か、中流の下の方の階級の趣味の悪い女で、趣味が良く機械製ではない上流階級向きの商品は、それがどんなものであれ、断固踏みつけようとするのである。ジェイムズは、反物業者としてのきらびやかな夢のみならず、繊細な独創性までもが、趣味の悪い運命の女神の、執拗な断固とした足で押し潰されるのを見たとき、宗教的な神秘状態と紙一重の、絶望状態に陥った。そして、天国の影響がどうだとか、天使イスラフェル（イスラム神話の音楽の天使）のことを、曖昧に妻に話して聞かせた。可哀想な女は、イスラフェルにとっても驚き、ジェイムズの気紛れに、すっかり混乱してしまった。

とうとう——ジェイムズが転げ落ちた急坂のことを、大急ぎで語るのであるが——正真正銘のハフトン商店の大売出しの日が始まった。ハフトン商店の大売出しは大事件だった。数年じっと我慢して、みごとにやったのだ。柄物も、サテンも、デミチも、ヴェールも、もののみごとに気前よく値下げされた。青エンピツで三シリリング——ペンスにさつと横線を引き、涙をのんでその下に一シリリング三ファージングと訂正する。値段は木の葉が落ちるように落ちていく。堂々とした一シリリング——ペンスの値段が、六シリリング三ペンスに転げ落ち、一シリリング六ペンスが、魔法にかかったように四ペンス四分の三に縮まっていく。一方では、しっかりしたよい柄の布が、三ヤード三ペンス四分の三でだされている。今や好機だ。そのうえ、何年も役に立たず、少し色褪せていても、その商品が大衆の好みに近づき始